

変革は受容から始まる

南山短期大学名誉教授 星野欣生

1977年3月、多治見の修道院で行われた毎年恒例の人間関係科の教員合宿で、人間関係研究センター（以下センターという）の設立に向けての話し合いがもたれ、同年9月センターが発足した。私の記憶では、1973年に南山短大に人間関係科が生まれてから5年経過、ラボラトリー・メソッドによる学習が学生に定着しつつある時に、発足当初から期待されていた同学習の社会への還元、いわば社会人への適用を実践しようとするものであった。人間関係科発足当初から教員の間で合言葉のように言われていた言葉に“CHANGE”（変革）がある。チェンジというと、外からの力によって変化させていくというイメージがあるが、そうではなく、自らの力で変わっていく、成長していくということを強調したい。人間関係科やセンターの活動が展開していく中で、ファシリテーションという言葉が生まれ育っていく。私は、それはチェンジの発展した形であると思っている。ファシリテーションとは、個人、集団、組織、社会が“自立”していく過程に援助的に関わること。変革（成長）に向けて、つまり、自立に向けて関係的に関わっていくことである。このことを、私は、30年近く、人間関係科の学生や、センターでの公開講座で出会った沢山の人たちとの出会いを通じて学ばせていただいた。そして、ファシリテーションの根底にあるものが“受容”であることを、その過程でいやというほど実感させられた。言い換えれば、変革（成長）は受容から始まると言ってもよい。あるがままの相手をそのまま受け容れること、それは、相手が受け容れてもらっていると実感していなければ全く意味がないのだが。人は受容されていると実感した時に、あるがままの自分をそのまま受け容れるようになり（自己受容）、そのことが新しい行動への動機となり、自分の意志と力で変革（成長）していくとよい。それこそファシリテーションの目標である。それは、ファシリテーターとメンバーとの関係、メンバー相互の関係にもそのまま当てはまる。そのような関わりの形をつくるために必要なことは、関係づくりのスキルを磨くのは当然だが、同時に、“学習の場づくり”をどのようにするかにかかっている。それは、センターの講座で最も気にかけてきたことである。ともすれば、相手の気づきを促進するために、善意で手出しをすることがある。それは、相手の自立に余計な手出しをすることになり、自らの手で自立、独り立ちをすることとは異なってくるし、妨げになることすらある。あくまで、受容の風土をつくる、そのような場づくりをすることこそファシリテーターの立場である。それは、学習やトレーニングの場だけではなく、現代の日本の社会に、いや世界に失われつつあるものを回復させるための中心にあるものである。そのような場づくりのモデルを提供することこそ、センターの役割である。一層の発展を希ってやまない。